



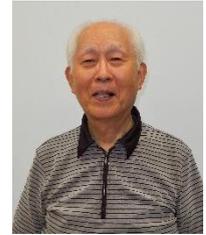
[令和 3 年 7 月 14 日 定例会発表要旨]

地名「札幌」の由来をたずねて

手稲郷土史研究会 会員 (アイヌ語地名研究会 会員) 渡辺 隆

◆はじめに

「札幌」の地名は 河川の流路変化と名称変更のため、今日までその由来の地を特定することができませんでした。このたび、新たな資料を組み合わせることで、由来の地を ほぼ解き明かすことができましたので報告します。



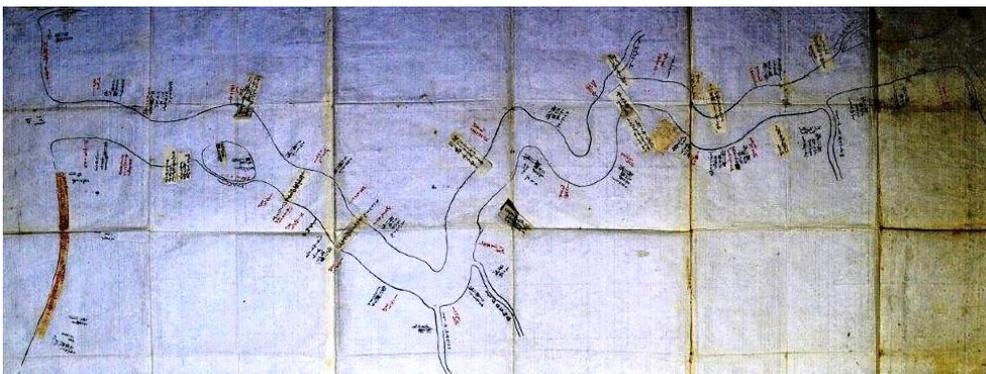
寛文 10 (1670) 年の『寛文拾年狄蜂起集書』※1 に「さつほろ」、元禄 13 (1700) 年の『松前嶋郷帳』※2 と『元禄御国絵図』※2 に「志やつほろ」、享保 16 (1731) 年の『津軽一統志』※3 に「さつほろ」の記録が見え、これらが最も古い記録です。アイヌ語地名は、和人がアイヌとの交易を行う場所に名称が必要であることから、アイヌから聞いた呼び名を用いることに始まり、その名がその土地の名称として定着してきたと考えられます。

『安政五午年書上絵図面』が 北海道博物館に納められています (下図参照)。この図に、石狩川の河口から江別川の川口までの両岸に配置されていた、漁場 32 ヶ所のアイヌ語地名、元小屋、和人漁場、アイヌ網引場、距離などが書かれています。そのうちの一つに サッポロ川の川口があります。ここは サッポロ川が 石狩川に合流していたところ、現在の篠路川下流、下茨戸橋が架かる辺りです。往時はここに「下サッポロ」の場所が置かれていました。交易用の干鮭、生鮭、獣皮 (熊・鷹) 等を積み出す拠点で、好漁場でもありました。 ※1 北大附属図書館所蔵 ※2 国立公文書館所蔵 ※3 国立国会図書館所蔵

◆サッポロ川 (現在の篠路川) の下・中流域の様子

【川口付近】 篠路川が 茨戸川 (旧石狩川) に注ぐ川口に 篠路川桶門が設置されています。19 世紀初頭、この西岸に アイヌ網引場がありました。辺りの土地の高低差は小さく、夏季から秋季の川面との高さは 1.5m 程度です。現在、この一帯には老木の痕跡が全くなく、陸地に変わってからの歳月が新しいことを物語っているようです。比較的平坦な流域で、往時も雪解け時や大雨が降ると大きな沼のようになり、水が退くと河原が広がっていたと思われます。篠路川桶門の南方 つまり篠路川の最下流部は、今は地下に隠れて見えません。地上は車道と駐車場で、車道を東方へ 50~100m 進んだところが、ホテルなどの大きなビルと広い駐車場になっています。駐車場の南方に 下茨戸橋があります。

【下流部の西方】 篠路川桶門より西方へ 50m ほど行くと 木々の蔭に篠路川下流が見えてきます。



北海道博物館所蔵
「安政五午年書上絵図面」
(村山家資料) より 部分

安政 5 (1858) 年、石狩場所の廃止にともなって作成されたと思われる絵図面。出稼人やアイヌの鮭・鱒網引場が詳細に記されている。

往時はこの川筋の辺りまで石狩川の大河が流れていました。今は篠路川沿いの南西方に平坦で広い緑地帯（高さ約2m・長さ約200m・幅70～80m）が広がっています。

【下茨戸橋の南方】篠路川下流に沿って上流の北東方へ約250m行くと下茨戸橋があります。かつては、この辺りにサッポロ川の川口があったようです。ここの兩岸一帯は、川面から高さ1mの低い土地で、増水時は水位が上がるので、居住用の小屋は建てる場所として適しません。

【下茨戸橋より中流へ】下茨戸橋よりさらに中流へ80mほど行くと、流路は南東へ曲がります。今の篠路川は、流れはほとんどありません。川幅は8～15mと広く、沼のようなところです。往時は川岸の北東部（右岸）に元小屋がありました。アイヌは漁労期間中のみこの元小屋に仮住まいしていたと思われます。この辺りは開発の手が加えられていないようで、かつてのサッポロ川が大河であった面影を残しています。下茨戸橋の許より南東方へ篠路川の兩岸沿いに『篠路川 自然とふれあいの広場』が整備され、散策路が続いています。篠路川は、茨戸川に注ぐ川口より南東方の上流へ1.7km、くねくねと蛇行しながら往時の川筋を残していますが、現在、上流部は埋め立てられ宅地になっています。川の最上部は、茨戸福移橋で堰き止められています。

◆サッポロ川の流路変化と名称変更

17世紀頃のサッポロ川は、今の豊平川上流の白井川、小樽内川、薄別川、豊平川本流などを集め、真駒内川を吸収しながら、藻岩山の麓を北方に流れ、さらに旧コトニ川を吸収して札幌市内の扇状地中央部を北流し、石狩川（旧河道）に流入していたとされています。

サッポロ川の流路が大きく変わったことを示す「四・五年以前大水にてサツホロ川の川上切所出来」の記録があります。これは、文化3（1806）年に幕府の遠山金四郎と村垣左太夫が、石狩川を舟で江別川筋に抜けたときの巡検日記※4に見えます。ここに書かれている「四・五年以前」とは、寛政12（1801）年～享和2（1802）年で、札幌市史では1801年としています。サッポロ川は、この大洪水で今の豊平橋の辺りが決壊したため、流路を東北東方に大きく変え、現在の札幌東高校付近にあった泉を吸収し、月寒川、厚別川、野津幌川と合流しました。そして北東方に流れ、現在の江別市対雁で西に流れる石狩川に合流するようになりました。 ※4 北大附属図書館所蔵『遠山村垣西蝦夷日記』

一方、元のサッポロ川は、流量が大きく減少し、鮭・鱒などが捕れなくなると、場所請負人はその場所を棄て、漁労に携わっていたアイヌを他の漁場に移しました。静かになったこの川は、フシコサッポロ（アイヌ語のフシコは「古い」の意）と呼ばれ、江戸時代の末まで用いられていました。明治のはじめに開拓使は、旧サッポロ川下流部の名称を「篠路川」に、流路を変えた新しいサッポロ川を「豊平川」としました。なお、昭和16（1941）年、豊平川下流の雁木より福移までを北に流れるように新たな河道が開削され、以前の河道は旧豊平川と世田豊平川として残っています。

◆移動していた篠路川の川口

かつて本流であったサッポロ川の下流の呼び名は、明治初頭に篠路川に変わりました。この川は「大正5年測図」が作成された頃は旧石狩川（現在の茨戸川）に直接繋がっていました。この辺りの流路は、「大正5年測図」と「昭和10年測図」とはほぼ同じです。ところが15年後に発行された「昭和25年修正測図」と比べると、篠路川最下流の約50mは消えています。これは、この部分の茨戸川の流路が西方にずれて河原が広がっていることを意味します。この流れが変化した時期は昭和10（1935）年～同25（1950）年の間に限られます。そしてその原因は大洪水のためと考えられるので、この期間における旧石狩川下流域の大水害に関する記録や新聞記事を調べました。札幌地方で発生した大水害は5回ありましたが、篠路川川口の洪水発生時期は特定できませんでした。

結論として、下茨戸橋から西方へ広がる茨戸川（湖）まで約300～400mの河原一帯は大洪水が発生すると水面が広がり、水が引くと乾くということが繰り返されていたことから、アイヌがその様子を「さつほろ」と呼んだもので、この辺りが地名「札幌」の発祥地かと思われます。

●研究ノート 「軽川」地名伝承に挑戦する ― 永田方正説を補正する旅(1)

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭



軽川河畔に設けられた説明板

1. はじめに

私が手稲へ来たのはちょうど長女が一年生に入学した昭和53(1978)年で、前田小学校が開校し、その第一期生であった。手稲前田に新しく造成された分譲住宅の二階に上がったとき、窓の正面にドンと手稲山が聳え立ち、たちまち虜になり即断したことを思い出す。頭金を出してくれた父が「あそこは昔ガルガワとっていた。小樽で中学生のときに遠足で行ったところだ」と言った。それが私の初めて聞いた「ガルガワ」であった。その後、札幌市中央区勤務の私にとって、手稲は文字どおり単なる寝に帰る場所になってしまっていた。改めてガルガワに触れる機会が増えたのは、それから32年が経過し、現役を引退して晴れて“手稲人”となり、手稲郷土史研究会に参加してからである。

軽川(以下、地名は漢字、音が必要な時はカタカナ表記とする)が脚光を浴びるようになったのは明治14(1881)年に小樽手宮から札幌まで鉄道が開通したときで、翌年には正式に駅名として時刻表に載り、全国にその名を知られるようになった。この無料で無期限の広告宣伝効果は著しく、しばらく軽川は手稲よりも比較にならぬほど高名であった。昭和27(1952)年、手稲町議会が手稲町字軽川を字手稲と変更する決議をし、郵便局や小中学校の名前が変わり、軽川駅も手稲駅へと改称された。手稲の地理では、軽川はもともと手稲山の中腹を源とする川の名である。短い、かなりの急流で、山麓を下ってから扇状地を形成し、その上に手稲本町が発達した。そしてこの川の名がいつしか地名として定着する。町議会の議決後、多くの軽川名は消えていったが、現在も川の名前としては健在である。先人の努力により、両岸に桜堤の散策路が作られ、朝夕には多くの区民に親しまれている。

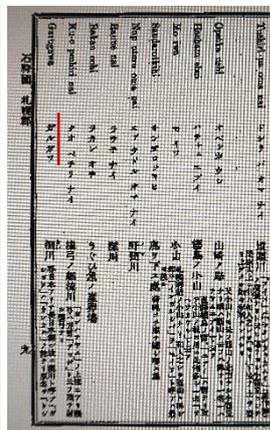
当時も今も、手稲がなぜ軽川と呼ばれていたのかと聞けば、「涸れ川が訛って、ガルガワになった」と誰もが言ったものである。私も、最初は何の疑いもなく先輩諸氏のこの説を聞いていたが、妙に軽さを感じ、どうも腑に落ちないという気がしていた。しかし、それには証拠があって、明治24(1891)年に出版された北海道庁属 永田方正著『北海道蝦夷語地名解』に載っているのである。―『ガルガワ、涸川 春日水アリテ夏日水無シ故二涸川ト呼ブ「ガルガワ」ハ「カレカワ」ノ訛ナリ原名ヲ「トシリパオマナイ」ト云フ奥羽人初メ「ガルサワ」ト呼ビ今「ガルガワ」ト云フ故二軽川ノ字ヲ用フ誤ヲ以テ誤ヲ傳フ者ト云フベシ』。

永田は北海道内の殆どの地名を創出したが※注1、軽川は彼が来道する以前に既に存在していた。永田の創作方法はアイヌ地名の音を漢字に替える方法、またはアイヌ語地名の意味を表す漢字にすることを中心にしたが、もちろん軽川はそのどちらにも属さない。しからばこの名前はいつごろ誰が付けたのか、いよいよ興味深い謎が生まれた。

〈つづく〉※注2

※注1 本多貢『アイヌ語地名ファンブック』(彩流社2005年)より「第六章 なぜ永田地名解か」参照。

※注2 この稿は、北海道文化財保護協会機関誌「北海道の文化」vol. 93(令和3年3月発行)に所収されたものです。数回に分けて掲載します。



国立国会図書館蔵『北海道蝦夷語地名解』より部分

「手稲郷土史研究会」の当面の活動について

今夏は記録破りの酷暑を体験いたしました。道内は15日連続猛暑日、札幌は18日連続真夏日となり、97年振りに記録を更新したそうです。皆さまには猛暑を乗り越えてお元気にお過ごしのことと存じます。

さて、新型コロナウイルスの国内感染の拡大は留まるどころを知りません。対策が後手後手となって蔓延に追いつきません。北海道に3回目の「緊急事態宣言」が発せられました。このような事態ですので、予定していた次の活動を中止とさせていただきます。ご理解ください。

- 9月定例会…9月8日(水) 18時15分開始 手稲コミュニティセンター ⇒ 休館・中止
- 日帰り研修バス旅行…9月21日(火) 8時30分集合 札幌市内および近郊視察 ⇒ 中止

定例会が中止になるたびに 研究発表の調整を余儀なくされたり、苦心して構築した研修旅行の計画がご破算になったり、とくに研究部の皆さまにはたいへんご苦勞をお掛けしています。

そのような中、今回も会報『郷土史ていね』第163号をお届けすることができました。関係各位のご尽力に感謝いたします。

「緊急事態宣言」は8月27日から9月12日までですが、適用期日が来たからといって“コロナ禍”が収束するとは到底考えられません。このような状況ではありますが、好奇心と探究心だけは絶やすことなく、ご自愛のほどをお祈り申し上げます。

永井道允 (手稲郷土史研究会 会長)



★「定例会」の中止に伴う研究発表の変更について 手稲郷土史研究会の今年度の定例会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で四度中止となりました。それに伴い、当初9月と明年3月に予定していた茶話会は行わないこととし、5月に発表予定だった「手稲墓地に眠る思い出の人びと」(一ノ宮博昭会員)と8月に発表予定だった「山口バツタ塚 再考」(杉浦正人会員)の各研究を、3月の定例会でご披露いただきます。また「17世紀イシカリ大酋長ハウカセとテイネ」(沖田紘昭会員=会報第161号に要旨掲載)については、11月~2月の定例会で調整します。なお、今後の感染症の動向によっては、さらなる変更もありえます。あらかじめご承知おきください。

★会費納入のお願い 令和3年度の手稲郷土史研究会の会費(3,000円)について、未納の方はいらっしゃいませんか。「北洋銀行 手稲中央支店(普) 4048389 手稲郷土史研究会 会長 永井道允」あてお振り込み願います。恐れ入りますが、手数料は各自ご負担ください。

★原稿募集中! 小紙掲載のための原稿を広く募集しています。①手稲にまつわる随筆・研究文=研究報告に限りません。歴史や自然、気になるまちのできごと、子どもの頃の思い出話など“手稲にまつわること”なら何でもOKです。写真・図版を含め1/2~1ページ以内に綴ってください。②シリーズ「なつかし写真帖」=お宅のアルバムの中に、昭和期の手稲の町並・風景・建物・風俗などが見られる写真は眠っていませんか? エピソードとともに紹介してください。写真を含め2/3ページ以内。③コラム「遺構・遺物は語る」=建造物・碑・樹木・地形など“手稲の昔を物語るものたち”についてご紹介ください。写真+解説 1/2ページ以内。いずれも定例会で広報担当へお渡しくださるか、下記のメールアドレスあて送信願います。よろしくご協力ください!

次回定例会 ⇒ 発表内容「山の手博物館ものがたり」若松幹男(手稲郷土史研究会 会員) / 10月13日(水) 18:15~
手稲区民センター 3階 視聴覚室 / 会員限定・マスク着用! 感染症の動向により変更が生じた場合は別途ご連絡します。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第163号 令和3年9月8日発行 発行責任者:永井道允(手稲郷土史研究会 会長) 編集:菅原純子・佐々木光男
❖〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ 2階 札幌市市民活動サポートセンター レターケースNo. 277 手稲郷土史研究会
❖メールアドレス kyoudoshi_teine2005@yahoo.co.jp ❖TEL 090-3381-4994 (担当:林)